
それでも君は。

るーぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも君は。

【Nコード】

N9689G

【作者名】

るーぷ

【あらすじ】

新一が志保ちゃん大好き！な感じのお話です* CPは新志です。
苦手な方は即backして下さい！それ以外の方はどうぞ

プロローグ

———どうしても…君の美しさは隠せない———

新一は事件の捜査のため、ある有名作家の誕生パーティーに来ていた。

この作家とある若手政治家の間で何か取り引きがなされるという情報聞きつけ、馴染みの刑事たちとともに乗り込んだ。

高校を卒業し、スーツ姿もすっかり板に付いた新一は、目立たぬようひっそりとターゲットを観察しながら、手帳に新たな情報や怪しい人物を書き込む。

(ふーん…、あの作家38には見えないな。)

今回のターゲット、作家・高橋悠作は、38歳の誕生日を迎えた割にはとても若く見える。

彼の若々しさに素直に関心していると、ふわっと女性用の香水の匂いがした。

3

ードンツーパーシツ。

「…あつ。」

新一の手中にあった手帳が、地面にへばりついていて。と、思った次の瞬間には、見知らぬ女性の手の中に収まっていた。

「…あなたの？」

少し遠慮がちに話すその女性は、黒のマーメイドドレスを身に纏い、長い艶やかな黒髪をなびかせた。

「あ…、はい。すみません。」

女性は少し微笑むと、ドレスの裾を翻し、去っていった。

(……………すんげえ綺麗。)

彼女の後ろ姿を見つめながら隣家の居候をしている女性を思い浮かべ、何か重なる部分と言うか、共通点がある感じがして、余計に目が離せなくなった。

女性が見えなくなる前に、新一の携帯電話がポケットの中で震えた。

その振動で我に返り、チラリとディスプレイで名前を確認し、通話ボタンを押す。

「どうしました?」

『ああ、工藤君!実はね、あの政治家が8時に会場外で誰かと会う約束をしていることがわかったんだ。場所は…えーっと、このホテル

の12階、1208号室らしい。」

「…1208号室ですね。すぐ向かいます！」

そう言いつつ、携帯電話を閉じながらエレベーターに足を向けた。

謎の美女

12階に着いた新一は、既に部屋の近くで待機していた高木刑事と合流した。

「何か動きありました？」

「いや、まだ特には…。8時まであと15分以上あるしね…。あつ！」

高木が何かに気付き、新一も同じ方向に視線を向けた。

「あの人…！」

先ほどぶつかったあの黒髪の女性が、新一たちが張り込んでいる部屋に入っていった。

「工藤君、知ってる人なのかい？」

「あ、いえ…。」

不思議そうな表情を浮かべる高木に、少しごまかすように苦笑いを浮かべた。

ものの5分程で女性は部屋から出てきた。

「…出てきた！」

「俺、彼女を付けます。高木刑事、ここ頼みます！」
「わかった！何かあればすぐ連絡するよ。」

新一は高木から離れると、すぐに女性のあとを付けた。

…*…*…*…*…*…*…*

しばらく見張っていると、彼女は誰もいない喫煙スペースのソファに腰掛け、携帯電話を取り出し何回かボタンを押した。

(電話?…相手は誰だ?)

出来るだけ聞こえるように軽く息を止める。

「…あ、もしもし。ごめんなさいね、さっきは電話気づかなくて。
何か用かしら?…え?大丈夫よ、うまくやってるわ。心配しないで。
…ええ。」

そう言い終わると携帯電話をカバンにしまい、その場をあとにした。

…*…*…*…*…*…*…*

女性が再び会場の中に入っていったので、新一も続く。

（あの人…さつきわざと俺にぶつかった気が…。まさか手帳の中身を見るつもりで俺にぶつかったのか？…確かに今思えば、不自然にぶつかったし手元を叩かれたような…。）

そう考えながらチラリと女性に視線を戻すと、新一たちがターゲットにしている作家、高橋の方へ向かって歩いていった。

高橋を見張っている他の刑事たちも、何者かと少し気を張り詰めた。

すると女性は高橋の2メートル程手前で歩みを止め、体は動かさず、視線だけで会場内をぐるりと見渡した。

（……まさか、俺たちの存在に気付いてるのか？）

そう考えていると、女性は高橋の目の前まで来て、軽くお辞儀をした。

高橋が不思議そうな顔をしていると、女性は彼に耳打ちをした。すると高橋は何か納得したように微笑み、彼らは談笑を始めた。

ブーブー。

新一の携帯電話が、電話が来たことを静かに知らせる。

「はい。」

『工藤君、さっきの部屋にたった今あの政治家が入っていったよ。そう言われて時計を確認すると、ちょうど8時を回っていた。』

「そうですか、ではそっちに向かいます。」

そう言って通話終了のボタンを押した途端、また着信が入った。ディスプレイに表示された名前を見て、新一は自分でも気がつかないくらい、かすかに頬を緩めた。

「はい。」

『あ、工藤君？今どこ？』

「今、高橋悠作の誕生パーティー会場。あの例の取り引きが行われるか、張り込みしてんだよ。」

『…あら、そう。で？何か掴めたの？』

「今さっき、あの政治家の方に動きがあったみたいで、今高木刑事と合流するところ。何か俺たちが目をつけてる人物以外にも、怪しい奴がいるんだよ。」

『…怪しい奴？』

「ああ、美人なんだけど怪しい動きばかりしてる女。何か雰囲気志保に似てたな。」

『…あら、綺麗な人だから気にかかるんじゃないの。』

志保は新一をからかうように笑った。

「ちっ…ちげーよ！ほんとに怪しいんだよ、さっきも俺に不自然にぶつかってきたし、刑事の視線にも敏感に反応してる。…只者じゃねーことは確かなんだよ。」

『なら、その人の色香に騙されないように頑張ってるね。』

楽しそうにそう告げると、じゃあ切るわよと言って一方的に通話を終了させてしまった。しばらくツーツーと耳障りな機械音が繰り返された後、冷てえやつ、とつぶやきながら、それでも今度は自覚せざるを得ないくらいに頬が緩むのが分かった。それと同時になんだかやる気が出てきた気がして、少し軽くなった気持ちでエレベーターを12階で降りた。

そして怪しまれないように雑誌に目を通して（振りをしている）高木刑事の隣りにさりげなく座った。

「部屋の中には…」

「ああ、まだあの政治家しかいないはず。」

そう軽く会話を交わした直後、1208号室に高橋悠作があたりを気にする様子もなく入って行った。

しばらく様子を見て、10分程経った頃に新一が高木に目で合図した。

高木もそれに頷き、1208号室へ向かいドアをノックした。

はい、と高橋らしき男性の声が聞こえ、ドアが小さく開いた。

事件解決？

「高橋悠作さんですね？」

「はい、そうですけど…。どちら様ですか？」

高木が質問している間に、新一はドアのわずかな隙間から部屋の中を瞬時に確認した。

すると中には、少し小さめのトランクケース、ノートパソコン、そしてキラリと何かが黒光りした。

(…あれは！)

新一が合図を送ると、高木は胸ポケットに手を伸ばし、警察手帳を高橋に見せた。

「警察です！少し中を調べさせて頂きます。」

そついうと、困惑した様子の高橋を押しやり、部屋に入った。

「…っ！」

中にはあの政治家がソファに腰掛け、驚いた様子でこちらを見た。高木は彼に近づき、名前の確認をしている。それを一瞬視界に収め、先ほど気になったあの黒い物体に近づいた。

(やっぱり…。)

再び高木と顔面蒼白になっている政治家に視線を戻した。

「高木刑事！拳銃です！」

新一がそういうと、刑事の顔をした高木が二人に告げた。

「…お二人とも、署まで同行願います！」

その一言で他の刑事も部屋に突入し、慌てふためく政治家と、困惑する高橋を押さえた。

「…ふう、何を悪巧みしてたのか、こんな物騒なもんをテーブルの上に置いて…。」

新一が部屋にある物をひとつひとつ確認していると、部屋の外で聞き覚えのある女性の声がした。

「待つて！その人はこの事と無関係といつているでしょう？」

まさかと思ひ部屋の外に目を向けると、赤茶色が刑事たちの隙間からちらついていた。

それと同時に高木の声で、宮野さん、どうしたんですか？と聞こえた。

「志保!？」

驚いて外を確認すると、少しいらついた様子の志保が、黒のドレスを身に纏い立っていた。

「ちょっと工藤君?あなた名探偵やめたの?…何回も言うけど、悠作さんはこの取り引きとは無関係なの。むしろ被害者よ!」

ピリピリした様子の志保に少し尻込みして、事情を尋ねようとして新一が口を開きかけたと同時に、誰かが口を開いた。

「…あの、志保ちゃん?これ、どういう状況か説明してくれない?」

相変わらず困惑した様子で、苦笑いを浮かべた高橋がそう言った。

彼女の正体

「全く、悠作さんも人が良過ぎるのよ。」

まだ機嫌が直らない志保に、高橋は申し訳なさそうに笑った。

「悪かったよ、志保ちゃん。でも助かった。」

結局、あの政治家は高橋の付き人と手を組み、彼を騙し、彼の作品の著作権を奪おうとしていたのだった。その付き人も無事逮捕され、調べてみると、他にも様々な犯罪に手を染めていたことが分かった。

「つーか二人…知り合い？」

しばらく二人の会話を聞いていた新一が、少しすねた様子で尋ねた。

「ああ、悠作さんが科学についての知識を織り込んだ作品を書くときに、私の存在を知っているいろいろ聞きに来たのよ。それから、彼の作品を出版する前に譲ってもらったり、私の知っている情報を提供したりしているの。」

「そうなんだ、僕科学とかって全くもってダメなんだけど、科学捜査のドラマの影響でなんか書きたくなっちゃってね！ネットで調べたら、志保ちゃんのこと載っててすぐアポとったんだ。」

「はあ…。」

新一は納得こそしたものの、何かモヤモヤするのを感じた。

「それじゃあ、僕はパーティーに戻るとするよ！主役がないと始まらないし。」

「まあ、みんなあなたがいないのにも気付いてないようだけだね。」

クスツといたずらっぽい笑みを浮かべ、志保が言う。

「志保ちゃん…。」

志保の辛辣な言葉に、高橋はまた弱々しい笑みを見せた。

「嘘よ、早くいつてらっしやい。」

「…うん、じゃあまたね志保ちゃん、工藤君！」

「ええ、今度はちゃんとした付き人を選びなさいよ。」

志保がそう告げる隣で、新一は軽く手を振った。

高橋が会場に入って行くのを見送って、新一は志保をチラリと見た。いや、詳しくはジロリと睨んだ、の方が正しいだろうか。

「…何よ。」

志保もジト目を向ける。

「……………んだよ、あの男。」

ボソツとつぶやくと、志保はフツと笑った。

「あら、嫉妬に狂った名探偵さんは、私の変装も見抜けなくなるの

かしら？」

「…変装？」

志保は少し大きめのバックから、黒い何かを取り出した。

「あなたが見とれていた女性はこんな髪の色 of 女性じゃない？」
ゆらゆらを新一の目の前で、顔も体もない黒い髪だけが揺れている。

「……………へ？」

間抜けな声を発して、志保の身に纏うドレスを確認する。

「確かこんな黒のドレスを着ていたかしらね。」

そう言いながらドレスを見せるようにくるっと回る。

思考が停止した状態の新一は、志保が回ったときにふわっと鼻についた香りで、ぐちゃぐちゃになっていた思考が一本の線で繋がった。

「……………え……………ええ！？まさかあの女……………！」

「そう、私がああ女よ。」

勝ち誇ったように志保が笑った。

「あなたに電話したとき、私に似てるとか言うから少し焦ったけど、全然気付いてなかったようね。」

「……………何でわざと俺にぶつかった？」

「私が知らない情報を持っているかと思って。あなたの手帳の中身が見たかったの。」

「……何で1208号室にいた？」

「証拠を掴みたかったの。悠作さんから鍵を借りてね。」

「……じゃあ、誰と電話してたんだ？」

「博士よ、心配みたいでしょっちゅう電話して来るのよね。」

新一の質問に淡々と答える志保に、新一は脱力した。

「……つーか何で俺にそれを言わなかったんだよ。」

ふてくされた新一がそう言うと、志保は少し考えて、

「……ただ、あなたの驚く顔が見たかっただけ。」

と、綺麗な笑顔を見せた。

新一は一瞬その笑顔に見惚れて、何だかどうでも良くなった。

「目的は果たせたな。」

新一が皮肉って言うと、

「ええ。大満足だわ。」

と言って、今度は無邪気に笑った。

それにつられて、新一も笑う。

(……全く、飽きないやつだぜ。)

普段はクールな彼女が、こんな子どものようないたずらをすることを素直に可愛いと思った。

そして、彼女が喜ぶのなら俺は何回でもそのいたずらにはまってや
ろうと、軽い足取りで歩く彼女を見つめながら、そう思った。

最終話

「ねえ、今からどこか行かない？」

「そうだな…。どっか行きたいところあるか？」

珍しく外出することに積極的な志保に驚きつつ、新一はその意見に賛成した。

「あら、デートコースを女性に決めさせるの？」

「しっ…仕方ねえだろ？この時間から開いてるところって少ないし…」

少し考えて、思いついたように悪戯に笑う。

「なら、夜の海までドライブでもしましょうか？お嬢さん。」

そう言って笑い、志保の手を取り、助手席にエスコートする。

「ええ、喜んで。」

彼女が笑う気配がした。

もう辺りは真っ暗で、お互いの顔ははっきりと見えなかった。

しかし、ホテルからの光を受けて輝く志保の深いグリーンの瞳は、それだけで新一の胸を高鳴らせた。

どんな風に変装しようかと、どんな場所にしようかと、君の輝きははっきりと俺の目に映る。

その強く凜とした、それでいて儂く柔らかいオーラは、時に俺を錯

覚させる。

あまりに魅力的で、幻を見ているのではないかと。

ふっと消えてしまうのではないかと…。

そう俺が不安になったときは、いつもの勝ち気な笑顔で辛辣をくれるのだろう。

それさえも、甘い響きを持つてるように感じてしまう俺は、重症だろうか。

きつと、しわくちゃのおばあちゃんになっても…それでも君は、その輝きを失うことはないだろう。

君は、誰よりも美しい。

e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9689g/>

それでも君は。

2010年10月10日04時16分発行